
会長と風紀委員長と召喚獣

Scarlet ZoomAir After The Fainal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会長と風紀委員長と召喚獣

【Nコード】

N95070

【作者名】

Scarlet ZoomAir After The Fainal

【あらすじ】

今回の主人公は会長様！？さてさてバカテスの世界はどのような進んで行くのか……。あの人気作品がクロス！？生徒会とくればやっぱりあれっすよね。そうだ。あのSでオカマ野郎がでるやつも混ぜるかwwとか思っ書いていくラブとコメディーと学園、時々シリアスの四拍子がそろった何げなストーリー！

こう見えて作者意外と真面目。あ、性格とかじゃないよ？ホントダ

ヨ? 執筆がだからね! 勘違いしないでよね!!
／／／／

あっ……言い忘れてた。私、亀更新乙です(殴

p v 20, 036アクセス ユニーク 3, 348人
ありがとうございます!! これからもよろしくです!

主人公設定（前書き）

ネタバレ要素有り。

主人公設定

《名前》

風舞^{カザマイ}
空^{ソラ}

《真名》

零^{レイ}

《性別》

男

《身長》

180cm

《体重》

60kg

《一人称》

俺

《所属クラス》

F

《部活》

演劇部（副部長） 軽音楽部（副部長）

《委員》

生徒会役員（会長）

《好き》

音楽・読書

《嫌い》

噂で人を決めつける人・相手の事を考えない人

《容姿》

T A L E S O F T H E A B Y S S のルーク・フォン・ファブ
レの最終回 v e r . と同じ

《詳細》

容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能といった具合にだいたいのができるのが売り。中学生の時から部活や勉強、相談事を受けは答えを繰り返していくうちに教師や生徒の男女関係なく信頼を得ている。そのためか生徒会長の称号を一年生のときからものとしている。部活動は演劇部と軽音楽部に所属し、両方の部活の副部長をつとめている。何故副部長なのかは他の生徒や生徒が『流石に会長をやっ

て部活の部長をするのはしんどいだろう』と思つての事である。近所の人達にも評判はよく、子供達からは優しいお兄ちゃん。中学生からは頼れる兄貴分。大人達からは面倒がよくしゃかりした子といった感じである。Fクラス内で数少ない常識人で苦勞は耐えない。家は武家屋敷で古来からの武術を追求する家に生まれた長男。色々な武術の長所をできるだけ取り入れた究極の武ともいえる武術を幼少の頃から教え込まれた。武術の中には忍術も取り入れられているので変装なども得意。家訓で代々真名を大切にしてきた家系なので真名もあるがまだ秀吉と優子、雄二、翔子にしか教えていない。真名を教えてないものがこの名前を口にするとう容赦なく殴る。過去に言われ、相手を入院させたあげく、精神崩壊まで追い込んだことがある。家ではいつも着物を着用している（これも家訓）。噂に流されず、自分で確かめないと信じない。外にでるときは黒色の物を着けることが多い。

《召喚獣》

BLEACHの黒崎一護の卍解状態。腕輪の能力は月下天衝。

Prologue (前書き)

一、原則としてクラス対抗戦とする。各教科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は該当科目においてもっとも近い時期に受けた点数に比例した力を持つ。総合科目については各教科最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点になり、その戦争を行っている間は補修室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受け直して点数を補充することで何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を呼び出したにもかかわらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補修室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教科の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚獣自信の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

八、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもってのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問と

する。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

prologue

今日の天候は晴れ。個人的には曇りのほうが好きなのだがそこは仕方がないからよしとしよう。

いつもは登校時間より早めに学校に来なければならないのだが、なんせ今日は『クラス振り分け試験』の当日。生徒会の仕事はない。

ん？

ああ、言い忘れていたな。俺は生徒会に所属している。普通なら生徒会選挙とかいうものは2年生が2年生の後半にするものなのだろうが……ここは文月学園。残念なことに普通じゃない。

この文月学園は『試験召喚システム』という新技術を搭載した俗に言う『試験校』というやつだ。

まあ、そんな普通じゃないこの学校は毎年1年生が入ってきた2ヶ月後に全生徒。つまり1年生から3年生までの生徒を巻き込んで生徒会役員が決まる。

それで、俺こと『風舞^{カザマイ} 空^{ソラ}』は同じクラスの友人たちに推薦されて、いつの間にか生徒会役員に選ばれたというわけだ。……しかも会長に。

ちなみにだが演劇部と軽音楽部を掛け持ちしていて、両部活の副部長をやらせてもらっている。演劇部のほうの部長は3年生の先輩がやってくれている。軽音楽部のほうは何と言うか……面白いやつらが1年生で入ってきてそいつらのうちの一人がやってくれている。

……はつきり言ってもものすごく不安だ。

まあ、今はこのことはおいておくでしょう。

そんなこんなで今日は会長としての責務がないから友人の1人である『坂本^{サカモト} 雄二^{ユウジ}』と『吉井^{ヨシイ} 明久^{アキヒサ}』と一緒に登校している訳だ。

「よし明久、テスト前の小手調べだ！」

俺が色々なことを思考(?)している間にいつのまにかテストの問題を雄二が明久に出すようだ。雄二は昔は神童とまで言われていた人物だ。が、それはあくまで『昔』。ある事件がきっかけで勉強を全くしなくなってしまったので今は全然ダメだ。

「『三権分立』は『司法』と『立法』ともう一つはなにで成り立つか？」

本当に小手調べのようだ。はつきり言って簡単すぎると思うのだが……。

「ふ……あまり僕を見くびらないでくれよ雄二……」

ほら見たことか。こんな問題、明久でも解けるぞ。

ああ、明久という人物はアホでバカでクズでバカな人物のことだ。
……バカが二回も入ってしまったのは仕方がないことだ。あまり気にしないでくれ。明久はこの学園初の『観察処分者』だ。

この観察処分者というものは簡単に言うとはバカの代名詞で、教師の雑用係のことだ。

そういえば最近、学校内のいたるところからNEW WORDとして『AKIHISA』なるものができたそうなのだが……本当なのだろうか？

「……二つまでは絞れる」

……完全にはわかってなかったのか……そんなに歯をキラキラさせておいて……。いや、しかし明久からしたら2分の1の確立でも良いほう……なのか？

「ほう」

なんだか雄二がボォーとしている。こういうときの雄二は何を考えているのかわからないのが残念だ。

「『憲法』か『漢方』のどっちかだったはず……」

「『行政』」だバカ。」

：まあ、少々危険な御趣味をお持ちになっているお方だ。まあ、それは明久にも非があるときがだいただから仕方がないが、それ以外の時は結構抑えてもらっている。

それにしてもなんで島田は顔を赤くしているんだろうか？……風邪なのか？おっと、そんなことを考えているうちに試験会場に着いたようだ。

くクラス振り分け試験 本番く

会場内が静寂に包まれている。聞こえてくるのは俺や周りのやつらの呼吸する音と解答欄を埋めていく音と時計の針がチクタクと奏でる音だけだ。

（やはり試験校といっても高校……。中学で習った問題が4く5割出ているな。本当に勉強している奴らからしたらこんなもの簡単なものだな。）

このクラス分け試験というものは生徒たちの中では難しいと噂されている。だが、やはり噂は噂。どうしても尾ひれがつく。

確かに難しいことには違いないが…問題ない。

この程度なら”絶対” 8割は解けているだろう。だから簡単計算で

400点は堅いな…。

うん？どこからか椅子が倒れる音が……。明久と……。姫路か？

なんで姫路が倒れているんだ？…いや、別に今はそんなことどうでもいいか。今、必要なのはなぜ姫路が倒れているかじゃない。なぜ俺は姫路が倒れているのに呑気に試験なんか受けているのかだ！！

ふう……。落ち着け、俺。やることは一つだ。……はは、これじゃあFクラス確実だな。まあ、仕方ないね。

「明久、席に戻れ。他のみんなもだ。」

周りがざわついている。まあ、当たり前だな。生徒が倒れているのだから。

「でも！！」

とくに明久がうるさいな。まあ、こいつは姫路のことが前から好きだったはずだし…な。仕方ないかな？

「でもじゃない。お前は試験を受けていろ。姫路は俺が保険室まで連れていく。」

「だ、だけどそれじゃあ空が!!」

「そうだな。だから？」

「『だから?』って:「俺は会長だ。会長として生徒を保護し守ることは当たり前のことだろう?」だからって「それに!」っ!?!?」
……「それに、だ。一人の男として異性をほったらかしにしたままというのは俺の魂にそむくことになる。それだけはいやなんだよ。」
……………わかったよ。」

……めっちゃ恥ずかしい! 説得するためとはいえこんなことを言うはめになるなんて……鬱だ。また雄二にいじられる。

「空舞。試験途中での退席は『無得点』扱いになるがそれでも良いかね?」

不正をしていないか見張っていた先生の一人が申し訳なさそうに近づき、言ってきた。

「はい。異論ありません。」

しかし、先生たち。さっき俺が言った『会長としての』ってやつは先生の仕事のうちでもあるんだけどな……サボる気満々だ。後で竹原教頭だけ学園長に言っておこうかな? 小悪党だし……別にいいよな?

〕試験終了後。 16；00〕

その後、保健室に姫路を運び込んだが全然目が覚めなかった。

今では熱も結構下がったが、汗がすごかった。体をふくのとかは先生がやってももらったけど、他は先生にも色々仕事があるだろうから俺が全部やった。一応こういうことは知識としてもあるし、やったこともあるので多分できたと思う。先生も何も言ってこなかったし。まあ、こういうときほどこういうことを覚えていてよかったと思える時はないだろう。

途中、一年生の時に姫路と同じクラスだった人が保健委員だからって来たけどテストで疲れたいると思うから帰ってもらった。

「はれ？……ここは………？」

やっと姫路が起きたみたいだ。テスト開始時間が9時で昼食や休憩を挟んで約7時間もの間眠っていたことになるな。寝すぎたのからろれつも回っていないし、まだ焦点もあってないから俺がここにいるとはわかってないんだろう。わかったとしても誰かが多分誰かがいる程度だな。

「ここは保健室。ついでに言うと今は午後の4時だ。」

「……空君？」

おっ、やっと焦点があったかな？昔から少しパワーっとしてたけど……変わってないな。

「はいはい。空君です。」

あ？顔が赤くなった。風邪でもぶり返したのか？

「ふえ！？あ、いやその空く……じゃなくて！風舞君！？どどどうしてここに……というかここ、保健室って？え？……え？？」

おおおお、いい具合に混乱してるな。見てて面白いというかなんというか……いやあ……癒されるねえ

「とにかく落ち着け。なんでここに……だったか？それは試験中に倒れた姫路を俗に言う御姫様抱っこなるものをして保健室まで運んだのが俺だからだな。おわかり？」

「お、お分かりです。……って！？御姫様抱っこ！？（ボンッ！！）はうううう……」

ありやりや。爆発しちゃった。でも、ま、元気そうだね。

「先生。結構元気そうなんで帰りますね。」

後で明久にも連絡しとかないとな。あいつの場合心配して徹夜しちゃうだしな。そういえばあいつって携帯もってたっけ？というか、持っても止まってるとかいうオチじゃないだろな……。あいつの場合はありそうで怖いな。バカだし。超バカだし。超超超バカだし？ 大事だからもう一回行っとくが：バカだからな明久は。

第一門 Fクラス（前編）（前書き）

？「……ねえ」

？「ん？なんだ？」

？「さっき雄二と空が話してた大化の改新っていつのこと？」

雄「三年生にもなってまだそんなことも知らないのか？翔子は馬鹿だなあ」

空「……（いや、俺達が異常なだけだと思うんだが……）」

翔「……まだ習ってない。雄二達の頭がよすぎるだけ」

雄「覚え方は簡単だぞ？『無事故の改新』で覚えるんだ」

翔「……無事故？」

雄「忘れるなよ？大化の改新は無事故で起きたから————」

翔「うん」

雄「————『625年』だからな」

翔「……わかった。きちんと覚えた」

空「……（645年だな。まあ、6年生になるまでに間違いに

気づくだろうから言わないでおくか」

雄「よし。忘れるなよ」

翔「……大丈夫。絶対に忘れない」

【第一問】

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ上げなさい』

姫路瑞希・風舞空の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金の例なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんと風舞君は引っ掛かりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われましても。

第一門 Fクラス（前編）

俺らがこの文月学園に入学してから二度目の春がやってきた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生や在校生を迎えてくれている桜達が咲き誇っている。ちなみ、だが。この桜達を植えたのは過去の生徒会役員とボランティア部だそうだ。もちろん先生もいたが先生たちは主に子供にやらせてそれを見守っていたそうだ。最近の世話は近くにある花屋さんのお姉さんがして下さっている。なんでも『今年の生徒会はカッコいい……おもしろいから♪』だそうだ。生徒会といっても今年の生徒会は俺を含めた三人しかいないんだがな。いや、執行部のほうも入れたらそれなりに結構いるが、やはり生徒会役員だけを見ると文月学園初の数の少なさらしい。当たり前だが。昔のほうがおもしろいと思うのは俺だけだろうか？

それで今年の生徒会役員が三人でもうまくやっていけているし、学業のほうも優秀だからという理由で学園長の友人が経営しているに他校交流として行ってこいとこの前言われた。いつでもいいらしいのでまだきまってはいいないが、そのうちすぐに行くことになるだろう。そして、この学園長の友人が営んでいる高校というのもまた一味違うらしい。確か『碧陽学園』というところと生徒会だけで一度合併してみららしい。むこうの生徒会もOKが出ているらしいので、後はこっちの生徒会が手元にある生徒会の仕事を終わらせたら合併することになるだろう。この前聞いた話だが、この話は学園長と西村先生、教頭、高橋先生の四人で話し合った結果らしい。いやいや、他の先生たちも入れてあげましょうよ。そこは。本当に困る。ああ、思い出すだけで頭が痛い。

「空様。大丈夫ですか？」

「ああ、すまない茉莉花。君もいつも忙しいのにすまないな。」

「いえ。むしろあの『クソオカマ』と離れて清々します。」

この暴言を平然と言ったのける女性は『夕王寺 茉莉花』^{シノウジ マツリカ}と言って、『祇堂 鞠也』^{シドウ マリヤ}という人物の専属メイドだ。ちなみにさつき茉莉花が言っていたクソオカマとは鞠也のことだ。まあ、彼女たちのことは後々話すでしょう。

「はは、茉莉花もストレスがたまってるみたいだね。鞠也はいつも通りなのかい？」

「はい。最近では編入してきた一つ年上の『宮前 かなこ（ミヤマエ カノコ）』という方が鞠也様の『秘密』^{はけぐち}を知ってしまいましたので、毎日のストレスの捌け口になっていますね。」

「あらら、バレたのか。じゃあ『GAME OVER』ってことかい？」

「いえ、編入『前』でしたのでゲームオーバーではありませんでした。実に残念です。」

「ああ、そうなんだ。しかし、宮前って先輩も災難だね。鞠也の秘密を知ってしまったばかりに……」

俺と茉莉花はお互いの最近起こった出来事を報告しあいながら桜が立ち並ぶこの通学路と一緒に歩いていく。そういえば説明していなかったが、なぜ鞠也の専属メイドである茉莉花が俺と一緒に文月学園まで通学しているのかというと、これは鞠也の意思だそう。本人いわく『他校の生徒に自分のこの海原のごとき寛大な心を見せびらかすため』とかいっているが、それは絶対ないだろう。なんせ今の時間は俺が生徒会の仕事やら演劇部と軽音楽部のいけなかったときの部活動内容を確認するために6時になるかならないかぐらい。茉莉化や鞠也が通っている『天の妃女学院』とかいうところは朝食開始の7時30分まで生徒はほとんどの生徒は寮を出ない。自宅通学の人たちもこんな時間に天の妃に向かうのは本当に遠い人だけだろうが、そういう人は寮に入っているのではないだろう。この通学路をこんな時間に通るのはほんの数人程度だろうからこっちもあんまり意味ないし。なにより、俺の家のメイドと思われるぐらいだろう。

ちなみに鞠也は茉莉花に文月学園につくまで空とできる限り情報交換をしてくれといったそう。これを俺的に訳すと『ちょっと空のところまで散歩がてら行って休憩してこい』といった感じだと思う。実際こういうことに関してはあまり外れたことはないので結構自身はあったりする。7時30分までに帰らなければならぬのでつかの間の休憩になるだろうが、そこは少しでも休憩させてやりたいという鞠也の願いだと信じたい。本人に行ったら絶対否定するだろうから確かめようがないのが残念だ。

そうこうしているうちにとうとう文月学園についたみたいだ。

「風舞か、今日も早いな。夕王寺もいつも御苦労さまだな。」

俺達が校門までいくと少々ドスのきいた声で呼びとめられた。

「西村教諭、おはようございます。これぐらいじゃないと仕事が終わらないので仕方がないですね。あはは」

俺はそう言いながら西村教諭にぺこりと頭をたれた。

「おはようございます。西村教諭こそお疲れ様です。」

と、茉莉花も俺の斜め後ろで俺と同じようにしている。

西村教諭は学園内で『生活指導の鬼』と呼ばれていて、生徒の間では『鉄人』というあだ名で呼ばれている。なんでも西村教諭の趣味のトライアスロンと真冬でも半袖でいることが理由らしい。

「じゃあ、茉莉花。今日もここらへんで。気をつけろよ？春先は変態どもが歩き回っているからな。」

「わかりました。では、また明日。」

茉莉花は俺と西村教諭に一礼して立ち去って行った。そして、茉莉花がちょうど見えなくなったところで西村教諭がため息まじりに、しかし、少々変な顔をしながら口を開いた。

「はあ……あのバカコンビ達も夕王寺を見習ってほしいものだ。」

「無理ですよ、茉莉花に合わせたことないですし……性格的にも。しかしそれはそれで気持ち悪いと思ってるからそんな顔をなさっているのでしょうか？」

「まあな。ああ、そうだ。これを渡さないとな。」

そういつて近くおいてあった箱から風舞 空と書かれた封筒を渡してきた。

「ありがとうございます。」

この封筒の中には自分の所属することになるクラスが記されている。こうやってわざわざ教師がいちいち生徒に渡すというのも普通ではないこの文月学園ならではのことだ。

まあ、俺の場合は途中退席で0点だから行くクラスはわかりきっているんだが、こういう場合でも渡すあたり、やはりどの生徒にも統一されているんだろう。じゃないと0点とわかりきっているやつに渡す必要がないからな。

「しかし、残念だな。姫路にも言えることだがお前ならAクラスは確実なのに……」

本当においしいことをしたといった顔をする西村教諭。

そういえば姫路のことを説明していなかったので今説明するとしよう。姫路、フルネームは『姫路^{ヒメジ} 瑞希^{ミズキ}』といって、少々病弱ながらも元気いっぱいな女の子だ。入学して一番最初のテストでは3位を記録し、その後も上位に名前を残している実力者だ。ちなみに俺は1位だった。……いや、すまない。なにも自慢したかったわけじゃないんだ。うん、ホントだから！とにかく石を投げるのはやめてくれ！！……ハッ！？いや、すまないな。どこからか電波が……な。まあ、とにかく成績優秀な子。

「仕方がないですよ。俺自身の勝手な自己満足で退席したんですから。」

そういながらも封筒を開けるのに超必死な俺。めちやくちやみじめな気持がでてくるが我慢しよう。REBORN!のラン○並みには……ね。てかもうめんどくさいので上の部分を破く事にする。だってめんどくさいんだもん♪……また電波が。……タヒねとかいちやだめだよ？

封筒の中には紙が入っており、その紙には表に書いてある者の1年間所属するクラスが書いてある。かくいう俺はわかりきっているが一応みてみる。

そこには大きな文字で『F』と書かれていた。

「では俺は生徒会室に用があるのでこれで失礼します。」

俺はそう言いながらも一礼し、学園内へとはいって行った。

く生徒会室く

俺が生徒会室で俺が仕事を終わらせていると、コンコンという音の後にガチャという軽快な音がしたとと共に2人の文月学園の制服を着た女子生徒が入ってきた。

「かいちよー。おはよーございますーす!!」

「おはようございます会長。いつも早いですね。流石です。」

「ああ、おはよう。みつきさんに璃子ちゃん。こんなの別に流石ってほどじゃないよ。」

「またまたあー、かいちよーは本当に世渡り上手ですねー。」

この元気いっぱいで俺のことを好んで『かいちよー』とひらがな風に呼ぶ子は『双葉^{フタバ} 璃子^{リコ}』ちゃんといって、この数少ない生徒会役員に選ばれたうちの一人だ。一年生で成績はBクラスの下位かCクラスの上位ってぐらいだ。

「学園初の二年連続会長になるぐらいですからね。一般生徒とは違いますよ。」

そして、この俺のことを褒めちぎっているのは会計の『倉内 みつき（クラウチ ミスキ）』さん。三年生でAクラスのトップ3にはいつも名前が入っている天才だ。

「そんなことないと思うんだけどなあ……。というかみつきさんも敬語じゃなくていいんだよ？」

「そうですね。では、気が向いたら……ということでもよろしいですか？」

「うん、それでいいよ。話し方は人それぞれだしね。」

「ありがとうございます。」

みつきさんはそう言いながら微笑む。その微笑みに一瞬頭の中が春になってしまったのだが、そこは俺。流石に隠し通すことにする。まあ、ばれたらばれたで本当のことを言ったらいいだけだし。別に少々美少女のほほ笑みはやっぱりきれいだなあとか、目の保養になるなあとか考えていただけで誰かがいやがる事を考えていたわけじゃないからな。

俺がそんなことを考えている間にみつきさんと璃子ちゃんは自分の

席に座ったみたいだ。みつきさんは俺の右前側の席、璃子ちゃん
は俺の左前側の席。顧問である高橋先生は右後ろに椅子と机を設置
して、そこに座ってもらっている。あんまり来ないから座ることは
あんまりないんだけどな。

俺が生徒会に入った時に話し合って決めた位置づけだから俺が選挙
に落ちたり推薦を断るかしない限りこの配置は変わることはない。

「それにしても会長も物好きですね。」

「ん？なにが？」

三人でそれぞれの仕事を黙々と終わらせているとみつきさんが何か
を思い出したのか、突然話しかけてきた。

「生徒の為に自らFクラスにいったという噂が学園内と会長が関
係をもった高校や近所に凄い勢いで広まっていってますよ？」

ああ……あの場所にはめっちゃくちや人がいたからなあ……試験会場
だから当たり前なんだが……。それにしても会長がFクラスって大
丈夫なのか？

「あー、それ僕も知っている！一年生の女子が騒いでたよ？『我らが会長が白馬の王子様みたいに瀕死の女子生徒をキッスで命の危機から女子生徒を助けた』って感じに！！」

「あー……尾びれがすごいついてるな……。まあ、噂ぐらい言いたいだけ言わせておけばいいさ。」

「そうですね。しょせん噂。されど噂。怖い時もありますがそういう噂はさせておけばいいでしょう。」

俺の言葉にみつさんが賛同する。璃子ちゃんが言う噂はさほど悪い噂ではない。噂っていうのは絶大な力があるけどそれは逆に言うのと凄く使い勝手がいいこと。情報戦とかも噂をまき散らすことが勝利への第一歩になることが多い。みつさんがいう『しょせん噂。されど噂。』というのはそういうことをさしているのだろう。

「おおー！さすがかいちょーにみつき姉！！いうことがちがう！！！！」

璃子ちゃんが尊敬のまなざしで俺達を見てくる。周りの空気がキラキラしている。なんというか……すごく……まぶしいです！！

「じ、じゃあ俺はそろそろクラスに行くよ！」

俺はそう言いながら早足に出ていく。ちらつと横目で見たみつきさんの頬のところに冷や汗を流していた。

頑張ってください。

俺はそう思いながらも無情にも扉を閉めるのだった。

オリキャラ紹介 ええ、私たちが生徒会役員ですが何か？

《名前》

双葉^{フタバ} 璃子^{リコ}

《性別》

女

《身長》

150cm

《体重》

詳細不明

《一人称》

僕

《所属クラス》

B(1年)

《部活》

帰宅部

《委員》

生徒会役員（書記）

《好き》

動物、雲、面白い人、空（主人公）

《嫌い》

難しいこと、面白くないこと

《容姿》

青髪のツインテール。瞳の色は赤色。前髪は左目が隠れるくらい長く、もう片方はヘアピンで留めて横へ流している

《詳細》

元気^{げんきはつらつ}澆^{しやう}渌^{りく}という言葉がよく似合う子。生徒会役員の書記を担当しており、空（主人公）のことを『かいちよー』と呼ぶ。成績自体は中の上くらいで、運動神経は抜群。特に球技系が得意で、ときどきだがスケルトンと呼ばれる。好奇心旺盛で知らないことにはすぐ首をつっこうもうとするが、本当に突っ込んではいけないところには絶対につっこまない。何気に空気を読める。起こると静かに起こり、面白いことには目がない。

《召喚獣》

不明

《名前》

倉内 みつき (クラウチ ミツキ)

《性別》

女

《身長》

169cm

《体重》

詳細不明

《一人称》

私

《所属クラス》

A（3年）

《部活》

華道部

《委員》

生徒会役員（会計）

《好き》

特になし

《嫌い》

魚介類

《容姿》

茶色の髪の毛のロング。瞳は黒色で眼鏡をかけている。

《詳細》

三年生内でマドンナ的存在。いつもトップ3に入る成績を持つ。毎月には一回は告白されるが、いつも『他に好きな人がいる』と言って断っている。好きな人は親しい人でさえも知らない。生徒会会計を

担当しており、いつも空（主人公）のサポートなどをしてくれる人物。生徒会内では基本無表情だが、優しいお姉さんの存在になりつつある。基本無表情のせいか、微笑んだときにギャップで、可愛さゆえに吐血する人が多数いたので『天使の微笑み（キラースマイル）』の異名をもつ。

《召喚獣》

巫女服で双剣を持っている。腕輪の能力は『テレポーテーション空間移動』。

第二問 Fクラス(中編) (前書き)

【第二問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと
(2) 悪いことがあった上にさらに悪いことが起こる喩え』

姫路瑞希・風舞空の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り
(2) 泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2)泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

第二問 Fクラス（中編）

「ああ……やばいな。これはちよつと遅れすぎたかな？」

俺は生徒会室から出た後、俺は高橋教諭に生徒会の出来上がった仕事を渡そうと思い職員室に行つとが、少し遅すぎたのか高橋教諭はもうAクラスに行ってしまったらしい。というか高橋教諭がAクラスの担任になることは初めて聞いた。まあ、先生たちの中でもトップクラスの得点をとれる人だからなんとなくそうなるんじゃないかなあゝとは思ってはいたが、西村教諭もそれなりに得点をとれるのでやはり確証はなかったから仕方がない。

とにかく、職員室にいた西村教諭に生徒会の仕事の書類を渡し、学園長に言伝を頼んだ。言伝の内容は『この前の碧陽学園との生徒会だけでの合併の件は、こちらの仕事も完了したのでいつでもOKです。日付や時間などは後々説明お願いします。』とだけ言っておいた。この言伝を頼んだ西村教諭が『やはりFクラスから違うクラスへと行かないか？もしかしたら俺が言ったら編成してくれるやもしれんぞ？』と言われた。西村教諭の気持は凄くうれしかったが、こはやはり俺だけクラスが変わったら他の生徒達に示しがつからないからと言ってなんとか下がってもらった。

そのあとに俺はFクラスへと向かっているんだが少し話しこみすぎたかもしれない。もしかしたらFクラスの説明やら自己紹介やらが終わってるかもしれないと思い、スタスタと足早に歩いている。

俺が歩いていると、前にピンク色の髪をした少女がテコテコと走っているのが見えた。早歩きの俺に追いつかれるとかどんだけ遅いん

だよとか思ったりしているんだが、走っている人物が走っている人物だから何も言えないのが現状。そう、お気づきの方もいるかもしれないが、俺の前を走っている少女とはこの前のテスト振り分け試験の途中に熱を出して俺と一緒に途中退席した少女こと、姫路瑞希だ。彼女は病弱なので体力もないからこのスピードでもなんとなくだが頷ける。……遅すぎるような気もするが、気にしないようにするほうがいいだろう。そうにきまっている！暇だし……いや、急いではいるんだが……何かしないといけないような気がするから演劇部で身に付けた技を使ってみようと思う。

「こら！廊下を走るな！！」

「ふえ！？す、すみません！西村先生……って風舞君！？」

そう。俺が『ボイスチェンジ声帯変更』で声を西村教諭の声にし、姫路に少々小さいめの声でどなってみたのだ。なぜに小さいめの声かというと、ここはすでに2年の教室が立ち並ぶ廊下だからだ。今他は自己紹介やら教室の説明やらをしているところだからどうしても声を小さくしないと他クラスを妨害してしまうことになる。それに、本気でどなったら西村教諭が走ってきそうで怖い。

「YES。MEの名前は風舞DEATHよ？」

「話し方がおかしい気が……」

「遅刻か？遅刻はいかんど、遅刻は。」

「え…と。す、すみません？」

「ブルアアアアアアアア！お前なめてんのかあああ（↑若本ボイス）」

「ひやあ！？ご、ごめんなさい？！」

遊びすぎた。だって面白いんだもん（反応が）。もうすぐそこにはFクラスがみえている。なんだかちよっとカビ臭いなあとか思っ
てはいたけど……中に入ったらもっとくさくなるだろうなあ…絶対に
見た目からしてぼろぼろだもんなあ。さて、なぜか……そう、なぜ
か！涙目になっている姫路を何とかなだめてFクラスに入らないと
な。昔からこの文月学園の学力が下のほうはなぜか女の子がな
いたりしたら近くの男子生徒を抹殺しようとする傾向があっ
たし、嫉妬がすごかったから女の子と二人でいたりすると殴
りかかってくるから気おつけなきゃね。どうせそういうやつら
が集まってるんだろうし。

「さて、そろそろ入るぞ。涙ふけよ？」

「は、はい！（さっきの風舞君の声怖かったけど戻ってよ
かったあ……）」

なぜか姫路が胸をなでおろしてたけど…なんでだろう？そ
んなにさっきの俺が怖かったのか？それともキモかたのか？それ
だとちよっと傷つくなあ……よし、今度からは気おつけよう！
そうしよう！

そう思いながらも俺はFクラスの扉に手をかける。そして、授業の邪魔にならない程度にガラガラと横にスライドさせながら中に入った。もちろん後ろには姫路がいる。

「失礼します。遅れました。」

「し、失礼します。保健室に行っていました！」

あら？保健室に行っていたのか。知らなかったな。まあ、知っていたら俺がストーカーみたいになりそうだから嫌なんだがな。いや、聞いてもないのに知っていたら完全にストーカーか？……やめよう。康太なら知ってそうだけどころなこと考えてたら色々悲しくなる。というか、俺って生徒会なのに色々と問題行動している奴らのこと見逃してるような気がするんだが……気のせい……ではないな。絶対に。

「姫路さんに風舞君。ちょうどよかった。自己紹介をお願いします。」

この先生は確か福原先生だったはずだ。面倒見がよく、そのよれよれした感じで頼りになりそうにないが結構頼りになる先生だ。俺としては結構好きな部類の先生だったりする。

「了解です。俺の名前は風舞 空。知っていると思うがこの文月

学園の生徒会長をやっている。俺には風舞 空という名前とは別に『真名』と呼ばれる名前があるが、そっちの名前を俺の許可なしに呼んだりするとただじゃ済まないからな？ よりしく頼む。」

「ええと、ひ、姫路 瑞希です。よろしく願いします。」

姫路もちよつとづつ落ち着いてきたみたいだな。教室に入る前から結構緊張してたからどうなることかとは思ってたけど大丈夫そうだな。それよりなぜかさつきから島田の顔が赤いんだが…大丈夫なのかあれは……。大丈夫か。島田だしな。

「し、質問です！なんでここにいますか？」

あれ？確か璃子ちゃんが噂になってるとか言ってなかったか？こいつらは知らないのか？ていうか明久！てめえまでなんで首をかしげてんだ！！お前は俺と姫路が保健室に行くのを一番間近で見てたじゃねえかよ！！いや、明久だし仕方がないのか？……仕方がないな。うん、仕方ない。馬鹿だからね。

「そ、その…試験の最中に高熱を出してしまいました……」

「俺はその姫路を保健室に連れて行ったからだ。」

姫路……そんなに恥ずかしいか？俺なんか全生徒を前にして色々言わなきゃならないときがあるが全然恥ずかしくないんだがな……。

それにしてもこいつら……

「ああなるほど。俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに……」

「ああ、化学だろ？ あれは難しかった。」

「俺は弟が事故にあったと聞いてそれどころじゃなくなてな……」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくてさあ」

「今年一番の嘘をありがとう。」

予想通りのやつらばっかだな。うまいこと馬鹿ばかり集まってやがる。唯一の救いはこの馬鹿どもをコントロールできるやつがいることか。

「で、では一年間よろしく願いしますッ！」

「まあ、程々によろしく頼む。」

程々にしてくれないとこっちの身が持たないからな。そこまでテンションあげれないから、仲良くなりすぎたら俺の精神が持たん。俺はたまたまあいていた『木下^{キノシタ} 秀吉^{ヒデヨシ}』のとなりに腰かけると秀吉が声をかけてきた。

「零、おはようなのじゃ。」

「おはよう、秀吉。今度もしかしたらだけど天の妃の演劇部と共同演習できるかもしれないぞ？」

「本当かの！？腕になるぞい♪」

秀吉は俺と同じく演劇部に所属しており、男なのに女役を良くさせられている奴だ。秀吉は生粋の演劇馬鹿で、その技量は俺や先輩をも超えるといっていだろう。家でも演劇の練習ばかりしているらしい。……少しは勉強もしてほしいものだがな。双子の姉で『木下キノシタ優子ユウコ』がおり、成績はいいので現在はAクラスにいることだろう。

「坂本君、君が最後の一人ですよ。クラス代表でしたよね？前に来てください。」

「了解。」

福原先生が雄二を前に呼んだ。たったそれだけが俺にとって雄二は昔ながらの親友だから雄二の動きや表情を見ただけでだいたいのはことは推測できる。そんな俺がだした推測は

（こいつ、なにかしやがる気だな。）

といった結果だった。

第三問 Fクラス（後編）（前書き）

【第三問】

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.」

姫路瑞希・風舞空の答え

『これは私の祖母が愛用した本棚です。』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのは*T h i s*だけですか。

吉井明久の答え

『☆●◆▽Γ♪*×

』

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

第三問 Fクラス（後編）

「俺達はAクラスに試験召喚戦争を申し込もうと思う。」

そして、俺の予想は全くうざったいほどに面倒な方向であたってしまったのだった。

END

）
BAD

っていう終わり方はどうかな？だめ？そう。まったく我儘なんだから……

ああ、あの一番最初に言った言葉は本当に雄二が教卓に立ってから言った言葉だからね？ホントダヨ？

う、嘘じゃないんだからね！？……うん。キモイな。

「勝てるはずがない」

「これ以上設備を落とされるなんていやだ」

「姫路さんがいたらなにもいない」

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。確かにAクラスとFクラスとの実力差はあきらかだ。あと、最後のやつ完全関係ないだろ！なんだ？おまえはあれか？姫路が好きなのか？それとも唯一いる女子を上げただけなのか？後者だとするとおまえは島田を忘れていることになるぞ？それとも島田は女とも思われてないのか？みる。島田が俺と同じほうに思考が言ってちよっと泣きが入ってるじゃないか。後で被害を食うのは明久なんだぞ？別にどうでもいいが……。

文月学園に点数の上限がないテストが採用されてから四年が経過した。このテストには一時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。そのため、テストの点数は上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。一番成績が悪いのがFクラスで、それから順番にE↓D↓C↓Bとくる。最後に一番成績が良い生徒たちがAクラスに行けることになる。

また、化学とオカルトとが偶然により完成された『試験召喚システム』というものがある。これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能になる。学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争————試験召喚戦争と呼ばれる戦いだ。

その戦争で重要になるのがテストの点数で、先ほども言ったようにFクラスは最下位。そして雄二が挑もうと思うと宣言した相手は最上位のAクラス勝てると思うほうがあり得ない。いや、こいつらが本気で勉強したら結構いけると思うが。やる気がない奴に限って能

力を隠し持っている奴が多い。秀吉の演劇に対する情熱を勉強に入れたらあいつもAクラスは行けるだろう。康太も、雄二も。島田は国語系を覚えたらなんとかいけるだろう。明久もそれなりに能力はあると思うし。だがこのままだと100%。絶対に、負ける。絶対になんてこの世にはないといわれようが宣言しよう。絶対に負けるだろう。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる。」

俺が考えていたことは雄二の頭の中でもわかっていることだろう。だが、また宣言する。――俺がAクラスに勝たせてやる。――と。

「何を馬鹿なことを」

「できるわけがないだろう」

「何の根拠があってそんなことを」

やはりというべきか。否定的な意見が教室内を飛び回る。だが、あいつは・・・雄二は勝利への活路を見出しているのだろう。俺達の中に。あいつはクラスの奴らの成績を知っているはずだ。試験召喚戦争がいつ行われるかわからないのに知らなかったら重要な場面で誰を送ったらいいのかわからなくなってしまうからな。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争でかつことので

きる要素が揃っている。」

雄二の言葉を聞いて教室内がざわめく。ひそひそと「要素？そんなものあるのか？」とか「チツ…寝言は寝て言えよ。」などといった言葉が飛び交う。……ん？寝言がなんたらかんたら言ってたやつ^の声は聞きおぼえがあるぞ？凄くな。まあ、後で話したらいいか。

「それを今から説明してやる。」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす幼馴染。

……ああ、聞かせてもらおうか。おまえの根拠を。言っておくが、俺を納得できるほどのものがなかったら俺は力は貸す気はないぜ？たとえそれが大切な幼馴染だとしてもな。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い。」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太と呼ばれた男子生徒。姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、康太は顔に着いた畳の後を隠しながら壇上へと歩きだした。彼の^{チャ}名前は『土

屋 康太^{コウタ}』またの名を

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙^{ムツツリーニ}なる性職人だ。」

「……！！（ブンブン）」

そう、ムツツリーニだ。土屋康太という名前はそこまで有名ではないが、ムツツリーニという名前は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を。女子生徒には軽蔑を持って挙げられる。まあ、一部を除くが。だいたい変態・変人どもが大量にいるこの文月学園に普通などあり得ないと言っていいほどのことなのだ。周りの生徒たちもムツツリーニのほうを向いて騒ぎ出す。

「ムツツリーニだと……？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか……？」

「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ……」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……」

畳の跡がすぐFクラスらしさがあふれ出ている。

「?..?..?」

姫路はムツツリーニ？なにそれおいしいの？といった感じのようだ。教える気は全くないがな。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく知っているはずだ。」

「えっ？私ですか？」

「ああ。うちの主戦力だ。期待している。」

確かに姫路は戦力にはなる。だが、それでAクラスに勝てるなんてことは全くないぞ？このままじゃ俺は手を出すこともないな。あいつはAクラスをどうにかしたいとかじゃないと思うんだが……。ま、勘だがな……。

「木下秀吉だっている。」

木下秀吉。さっき言った可能性の一つを担った一人だ。だが、まだ勝てない。

「おお……！！」

「ああ。アイツが木下優子の……」

「当然俺も全力を尽くす。」

確かに雄二も昔はすごかった。だが今は精々よくてCクラス程度。まだ勝てない。

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生のころは神童とか言われてなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんや風舞と同じく体調不良だったんだのか？」

「実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな！」

いけそうだ。やれそうだ。といった雰囲気は教室内を包む。そう、気がつけば士気は確実に上がっていた。俺以外。

「それに吉井明久だっている。」

そして一気に下がる。俺のテンション&士気も下がる。それはもう盛大に。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要ないよね！」

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

さっき自己紹介したんじゃないのか？もう忘れられてるって……もう重症だな。

「ホラ！折角上がりかけてた士気に陰りが見えてるし！僕は雄二達と違って普通の人間なんだから、普通の扱いを――って、なんで僕を睨むの！？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！？」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書は『観察処分者』だ。」

「それって馬鹿の代名詞じゃなかったけ？」

雄二の言葉にクラスの誰かがおそらくクラスの過半数が思っている疑問を口に出す。

「ち、違うよ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で「そうだ。馬鹿の代名詞だ。」肯定するな、馬鹿雄二！」

『観察処分者』。学校側が馬鹿で阿保でどうしようもない生徒に送る不名誉極まりない愛称だ

「風舞君。その観察処分者っていうのはなんですか？」

姫路が俺に聞いてきた。・・・？なぜ俺？

「そんなたいしたもんじゃないんだがな？ただの雑用だよ。主に力仕事を手伝っていてな？利点もあるが面倒なものだよ。」

「そうなんですか？でも利点っていうのはなんですか？」

ていうかもう寝たいんだけど……あいつが俺に本心を言わない限り俺はあんまり手伝わないつもりだしな。それに最近寝不足で眠気がどつときやがった……

「うあ？ そうだなあ……召喚獣の扱いになれているのと召喚獣を詳しく知ることができることかな？ 雑用で召喚獣の扱いには慣れてしまっただろうし、一緒に雑用とかしてたら色々と知ることだってできる。まあ、詳しくは明久に聞いてみなきゃわからんがな。」

俺がそういうと姫路は「そうなんですか……」と言って前を向いた。そして俺は眠気が最高潮に達していた。だが、雄二にだけは言っておこうと思い、メールで『お前の本音を聞かせろ。』とだけ書き送っておいだ。

そこで俺は暗闇の中へと落ちて行っただ。

第四問 会長と風紀委員長と・・・（前書き）

【第四問】

問 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。』

(2) $\sin(A + B)$ と等しい式を示すのは次のうちのどれか、？？？の中から選びなさい。

$$\begin{array}{ll} ? \sin A + \cos B & ? \sin A - \cos B \\ ? \sin A \cos B & ? \sin A \cos B \\ + \cos A \sin B & \end{array}$$

姫路瑞希・風舞空の答え

$$\text{『(1) } X \parallel \pi/6$$

$$\text{(2) ?』}$$

教師のコメント

『そうですね。角度を『 π 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。』

土屋康太のコメント

$$\text{『(1) } X \parallel \text{ およそ } 3』$$

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数は上げられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

藤堂春斗の答え

『(1) 書くのが面倒なので答えたくありません

(2) 上に同じ』

教師のコメント

解けるのなら解いてほしいのですが……。というか書く数はこの回答のほうが多いような気がするのですが……

第四回 会長と風紀委員長と・・・

「オイ！そろそろ起きたらどオなんだよ会長さんよオ！！」

「うぁ？」

誰だよ五月蠅いなぁ……。うん？そいえば俺はなんで寝ていたんだっけか？

ああ……。そうそう、寝不足で寝ちまったんだった。それより起こしてくれたやつに礼を言わないといけないな。てか、俺『うぁ？』ってなんだよ！？めっちゃくちはずかしいじゃねえか！！

「すまない。起こしてくれてありがとう。」

「ケッ……。会長さんに礼を言ってもらえるなんて至極光栄じゃねエか。」

うん？なんだかすつごく聞いたことある声なんだか…。それにこの独特の話し方……。間違いないな。

「なんだ、春斗じゃないか。」

「なんだ。とはずいぶんな言い方だなアオイ……」

この目の前にいる独特の話し方をする男は『藤堂 春斗』トウドウ ハルトは生徒会
実行委員の一人で、風紀委員長をやっている。春斗はこの文月学園
の学園長の孫に当たる。しかし春斗は祖母。つまり学園長のことを
あまりよく思っていないらしい。俺と春斗は親友をしている。まあ、
俺が勝手に思っているだけだね。そんな俺はよく春斗の愚痴を聞い
たりしている。その中に学園長と春斗の両親のことを話してくれた
時がある。もともと俺は中学のころから先輩や後輩など色々な人の
相談にのったりしているからこういったことには慣れているのが原
因なのかもしれない。

まあこのことはまた今度の機会に話すでしょう。

「親しき仲にも礼儀ありってか？俺とお前の仲で？ないだろ。」

「まあそおだなア。今さらだったな。」

俺が笑って言うのと春斗も微笑みながら答えてきた。ただ、その頬笑
みが凶悪に見えてしまうのは気にしてはいけない。もともと強面だ
ったのだから仕方がないのだ。それに、本人自身も結構気にしてる
っぽいしな。

「お前がFクラスにいることにはとくに疑問は感じないが……ま
さか『死神』までもFクラスとはな。あいつ、中学のころは結構成
績も良かっただろ？」

「あア、そのことか。それは俺も結構疑問に思ってたぜエ？お前
の言うとおりの結構成績良かったし…、まあ、そこは本人に聞いたほ

うがいいと思うぜ？」

「それもそうか…。」

俺達が言う死神は中学のころに一部。特に裏に関して詳しい奴なら絶対に知っている奴の通り名だ。俺も死神に関してはそこまで詳しくはないが昔、『悪鬼羅刹』。つまり、雄二同様に暴れまわっていたという話だ。だが、聞いた感じどうも色々と疑問に思ったことがある。色々俺も情報を集めてみたが、人質を取られたり、死神と同じクラスメートがさらわれたりしたときにしか出現しない。たまになんでもない時に出現したりはするが、それは些細なものだ。

「（……つまりあいつが暴力をふるったりするときはだいたいがわけありなんだよな。）」

「どオカしたかア？」

「いや、なんでもない。」

俺が考え込んでいると春斗が少し心配したような顔をしながら下からのぞきこんでくるように俺の顔——多分顔色でも見ようとしたんだろう——を見てきた。こいつは結構優しいんだ。強面のくせに……。一見不良。しかも常時武器を保持している。なぜ春斗が武器なんて持っているのかというと、風紀委員長の特権だったりする。風紀委員長と風紀委員との区別をつけるためらしい。腕に風紀委員長証をまいとけばいいんじゃないか？とか思うかもしれないが、そこは勘弁してほしい。この学園の学園長は色々他の普通の高校

とは違う風にしたいらしい。文月学園がこんなに変わってしまったのももしかしたら学園長の性格が一端を担っているのかもしれないと考えてしまうのは俺だけだろうか？いや、そんなはずはない！きっと西村教諭とか高橋教諭とかも少しは思っているはずだ！！…いや、でもあの2人も結構普通じゃないような気が…。気のせいか。うん、きっと気のせいだ。これ以上は気にしちゃいけない領域なんだ、多分、きっと、メイビー。

「死神に関してだが…」

「あ？あア…なんだ？」

「聞かないでおこう。きっとあいつのことだ。訳があるにきまっている。」

「あア…お前がそうきめたんなら俺はなにいわねエよ…」

本当に。こいつと親友でよかったと思う。雄二や明久はどっちかっていうと悪友とかそっち方面に近い感じだからな。でも、親友は親友だな。ただ近いっただけで親友には変わりない。

オリキャラ紹介 英雄？違います。風紀委員長です。

トウドウ
藤堂 春斗 ハルト

教室…Fクラス

肩書き…『紅の龍』

昔、荒れていたときについた名前。
だが、文月学園に入学してから、他校の連中に襲われている生徒を見つけては助け見つけては助けを繰り返しているうちに女子からは好意を男子からは尊敬を集めている。だが『紅の龍』が春斗だってことは空しか知らない。

『万能の蒼魔』

全知全能の神と文月学園で噂されている謎の人物の肩書き。先生と空以外は春斗が『万能の蒼魔』であることは知らない

身長 184.6

体重 60.3

部活動 演劇部

役職 風紀委員長

特技 変装（変装するときには演劇部で養った「俺式変装術!!」という）

性格（詳細） 風紀委員長をしているが正義感はまったくないだが、自分の感に障る奴はボコボコにするという物凄く黒い性格とくにナンパ等が嫌いで片っ端から潰していると他校の生徒からは紅の龍の再来と恐れられている

逆に文月の生徒には英雄扱いだ（助けるときは変装している）学園では演劇部に所属しているが、商店街で野外ライブをしている運動神経抜群で勉強もできるのだが進級するまで周りの人に知られないようにしていた（昔色々言われて面倒くさかったから）

毎日のように文月の制服を着て商店街で空と歌っているときに文月の女子生徒に見つかったとき、春斗は幻の美青年と呼ばれているのは余談だ（変装していたためまったくきずかれていない）肩書や凄さについては空と先生陣しか知らない。いつも点数を下げているので良くてBクラス、悪くてEクラス程度だ。（その日のやる気によって違う。）

試験召喚獣…全身黒で赤のラインと十字架のような模様が目立つ服装

武器は異様な模様をした片刃刀と前後に刃がついている両刃刀？だ
（主に片刃刀を使う。両刃刀は春斗が出てこいと思うだけで出てく
る）

召喚獣の能力…形態変化

召喚獣の形態が悪魔のような姿になる（元々小悪魔のようなものだ
が）

第五問 会長と神聖なる名前と・・・（前書き）

【第五問】

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって（ ）である』

姫路瑞希・風舞空・藤堂春斗の答え

『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

第五問 会長と神聖なる名前と・・・

「空ア、午後からDクラスと試験召喚戦争するらしいぜエ？」

「は？さっそくか？…いや、心変わりしないうちにつてことなんだろうな。雄二が考えそうな事だ。」

春斗が言うにはどうやら俺が眠った後に雄二によって担ぎあげられたFクラスがやる気を出し、明久にDクラスへと試験召喚戦争の宣誓布告宣言をしに行ったそうだ。そのあと、明久は制服をボロボロにして帰ってきたそうだ。…また雄二に嵌められたんだろう。少し考えれば団体で言ったほうが安全だったことぐらい思いつくのに…。まあ明久だし仕方がないのだろうが…。

「それと代表様から伝言だア、『昼飯食べたら屋上に来てくれ』だどよオ。確かに伝えたぜエ？」

「……了解。」

そういうと春斗は自分の席——席といえるかはなはだ疑問だが——に戻って行った。おそらく俺がメールで送った内容と関係しているのだろう。後、この後にすることになる試験召喚戦争についての意見とかでも聞きたいのかもしれない。だが、まずは俺を認めさせることができてからだ。

まあ、だいたいの見当は付いているけどな。本人の口から聞きたい

ってただけだ。そう、ただの自己満足。それ以外の何でもない。

「昼飯は……いいか。食べる気になれないしな」

あれ？なんだかこれシリアスルート入ってる？え！？あれ！？どこから入ってきたこの感染症^{シリヤス}！！

「…気にしないのが身のためだな。さっさと行くか。」

と、とにかく屋上へ移行そうしよう。

と

脳内では長焦ってるのに表面では冷静でいる俺は少々早足で屋上への道のりを歩いて行った。

屋上前まで来たわけだが……なにか騒がしいな。なんなのだろうか？

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き——」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ。」――に
したいと思ってました。」

……。どういう状況なのだろうか。どうやら出てくるタイミングを
ミスってしまったようだ。明久の変態発言を聞くことになるんて考
えてもいなかった。ちょっとこいつとの関係考えたほうがいいのか
もしれないなあ……

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ。」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな。」

「だって……お弁当が……」

秀吉、雄二、明久の順に話す。秀吉と雄二の瞳には憐れみしかない。
と、そこで雄二が俺が屋上に出てきたことに気がついた。

「お、零！来てたのか」

「零？」

「あっ！バク――」 「あ？今なんつった？」――落ち着け！
零！――」

明久の野郎……俺の真名を言いやがった……。自己紹介の時言ったよなあ？それでも言うってことは……殺っちまってもいいってことだよなァ！！

「雄二。そこオどきやがれ……。俺は掃除しなくちゃいけねェんだよオ……ッ！！」

俺の前で明久をかばうかのように立ちふさがる雄二に向かって怒気と殺気を込めて言う。雄二はそれでもどかない。冷や汗を流しながらも毅然と立ちふさがる。

「明久！早く謝るのじゃ！！空の真名を勝手に言った奴の中には植物人間になった奴もいるのじゃぞ！！」

秀吉が明久に向かって叫ぶ。そのすきに俺は自身の足を一步前へ出す。ゆっくりと足を前に進めていく。

「零！さっきのは俺も悪かった！！いつもの癖でお前の真名を呼んじまった。周りにお前の真名を知っている人がいるときは呼ぶなっていう約束を破っちまった俺も悪い！！勘弁してやってくれ！！」

雄二のその言葉で俺の熱くなっていた脳が覚めていく。瞬間的に真名を呼ばれて反応してしまった自分に少し嫌悪感が出てくる。

「……。もう大丈夫だ。雄二、迷惑掛けたな。」

「気にすんな。俺も悪かった。」

「ついでに頼まれてくれないか？ここにいるメンバーには俺の真名のことを詳しく話しておいてくれ。殺しかねないからな。」

「……わかった。メールの件は明日にでも言おう。今日は休んでろ。」

「……すまん。」

俺はそうやって屋上を後にした。

） side 三人称 ）

「さ、坂本。さっきのはなんだったの？」

空が屋上から去った後、少しの間の沈黙を破って美波が雄二に聞いた。その内容は先ほどの空のこと。なぜいきなり空が怒っていたのかについてだ。

「あれは明久が空の真名を呼んだからだ。」

「真名……ですか？」

雄二の言葉に瑞希が聞き返す。瑞希が聞き返した単語。『真名』についての疑問は雄二と秀吉を除いて全員が思っていたことだった。真名とは何か。なぜその真名を言っただけで空はあそこまで怒ったのか。全く分からない一同は雄二に視線を向けた。

「ああ。『真名』っていうのは親に付けられた名前。すなわち風舞 空という名前とは別につけられる神聖な名前のことだ。通常の家庭にはまったく無縁なことだから知らなくて当然だ。空の家はこの真名を大事に扱ってきた家系の長男だからこの真名をつけられた。」

「でも、いくら大事だからってあそこまで起こることでもないんじゃないの？」

雄二の言葉に美波が質問し返す。確かに真名のことを知らない人たちにとって空の反応は完全に理解できない反応だったのだろう。

「真名っていうのはすなわち空の本性を表すんだ。そうだな……例えるなら空にとって真名とは命そのものだといったほうが解りや

すいか？」

『ッ！？』

美波の質問に対しての雄二の返答はかなり驚愕の一言に尽きるのだろう。周りは哑然としているのが証拠だ。雄二はその反応を知ってか知らずか、いつもと変わらないような声音で話を進める。

「明久は知らずにだろうが空の命を傷つけたんだ。昔は真名っていうのを勝手に呼んだりした奴にはその場で打ち首っていうのが普通だったそうだ。それに比べたら空はまだ優しいほうだぜ？あいつ自身できる限り自分の感情をコントロールできるやつだから良かったが、あいつの親父とかに言ってみろ。即死はま逃れなかっただろうな。空は許すって言ってたからあんまり気にすることはないが、次はないと思ったほうがいいな。」

雄二の言葉に屋上にまた沈黙が訪れる。雄二は不意に空を見上げる。

（零の奴……この後の試験召喚にこいつらは必要不可欠だったのに……。まあ、今回は俺も悪かったことだしとやかく言う前にこいつらにやる気ださせなきゃいけないな。）

その後、雄二が場の空気をなんとか戻し、原作よりは少々低いがやる気を出させたのだった。

{
s
i
d
e

o
u
t
三人称
}

第六問 試験召喚戦争。略して試召戦争 ｝VSDクラス｝（前編）（前書き）

【第六問】

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希・風舞空の答え

『C6H6』

教師のコメント
簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン + ゼン Ⅱ ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていますか。

吉井明久の答え

『B — N — Z — E — N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

第六問 試験召喚戦争。略して試召戦争　　（vs Dクラス）（前編）

さっき雄二に聞いてみたんだが俺がFクラスに行くっていうのは一年生と三年生、近所の人にしか広まっていらないらしい。二年生にも親からだとか近所の別の学校に通っている友達とかから聞いている奴もいるらしいけどそこまで知られていないとのことだ。

なぜ今こんな話題を出したか？それはな……ただいまDクラスと戦争中だからだよ。まあ、今回は俺の出番はないんだけどね。だって雄二から理由聞くまで試験召喚戦争に出ることはないって言っちゃったし？とにかく回復試験だけでも受けといてくれて言われて受けてるけど……別に点数があつて悪いことなんて何もなしとにく受けといてあげようではないか。ということになりました。

「遠藤教諭、次の用紙をお願いします。」

「あ、こっちもお願いします。」

「……どうぞ。（Aクラス上位候補な生徒なだけあってやはり早いですね……）」

小声で遠藤教諭が何か言ってるけど、まる聞こえなんだよねえ。あ、遠藤教諭っていうのは英語の先生で、多少のことは見逃してくれる寛容な先生で、少々男子の女装姿に興味があるらしい。あ、後半は極秘情報だった……まあいいか。

で、俺の後にテストの用紙をくれといったのが姫路だ。俺と同じく

今は0点扱いだからどうしても回復試験を受けなくてはいけないことになっている。テストの解答の速さで言ったら俺のほうがちょっと早い。正確さもちよっとこっちのほうが正確らしい。まあ、じゃないと学年一位なんてとれないからな、当然って言っちゃあ当然かな？

そんなこんなでテスト全教科終わらせとこっと。さあいざ、無我の境地へ……………

） side 明久 ）

「吉井！木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテイルを揺らしながら駆けてきたのは同じクラス部隊に配属された島田さん。こうして改めてみると、背は高くて脚も綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。一体何が足りないんだろう。

「ああ、むn…………島田さん。どうしたらいいと思う？」

「…………ねえ、今何言おうとしたの？怒らないから言ってみなさい。」

「し、島田さんの気のせいじゃないかな？」

「……まあ、いいわ。」

あ、危なかった。空に女性には胸の話は禁止用語に入るから絶対話したら駄目だって言われなかったら絶対言ってたよ。空に感謝しなきゃね。

「そ、それよりホラ、シショウセンソウ試召戦争に集中しないと！」

試召戦争とは試験召喚戦争を略したものだ。気づいてるかもだけど。今現在前線にいるのは秀吉率いる先攻部隊で、そことFクラスの間あたりに僕がいる中堅部隊が配置されている。引き受けた覚えもないけど、部隊長になっている以上は僕には皆を導く義務がある。ここは気を引き締めていこう。まずは戦場の雰囲気を感じよう。耳を澄ませて、前線部隊の戦争の様子を聞き取るんだ。

「さあ来い！この負け犬が！」

「て、鉄人！？いやだ！補修室はいやなんだっ！」

「黙れ！捕虜は全員この戦争が終わるまで補修室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるから

な」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問は耐え切れる気がしない！」

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補修が終わるころには趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう」

「お、鬼だ！誰か、助けっ——イヤァ——（ボタン、ガチャ）」

よし、試召戦争の雰囲気はだいたいわかった。

「島田さん、中堅部隊に通達」

「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

ここで僕が出すべき指示はただ一つ。

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

殴られた。しかもチョキで。

「目が、目があつ！」

「目を覚まさない、この馬鹿！アンタは部隊長でしょうでしよう！臆病風に吹かれてどうするのよ！」

その覚ますべき目に激痛が！そういった台詞はせめてグーかパーで殴った後に言っしてほしい！

「いい、吉井？ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したら、アイツらは補給ができないじゃない」

島田さんがやけにもっともらしいことを言う。確かに彼女の言う通りかもしれない。僕らの役割は決して軽いものではない。働き次第ではこの戦いを大きく左右してしまうだろう。それなのに、僕は戦死ペナルティの補習が怖くて逃げようだなんて……！島田さん君は何て男らしいんだ！なぜだか涙が止まらないよ！（あと激痛も）

「ごめん。僕が間違ってたよ。補修室も怖がらずにこの戦闘に勝利することだけを考えよう」

「ええ。それに、そこまで心配することもないわ。個別戦闘じゃ弱いかもしれないけど、これは戦争なんだから多対一で戦えばいい

のよ。」

その通りだ。点数じゃ負けているけど、それだけ試召戦争の勝敗が決まるわけじゃない。やり方次第では勝てる可能性は十分あるはずだ。

「そうだね。よし、やるぞ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

拳を上げる僕たち。大丈夫、僕らならやれる！と意気込んでいると、島田さんのところの報告係がやってきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

さっきと言っていることが全然違う！

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

大いに問題がありのような気がするけどきつと気のせいだろう。

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

くるとFクラスに向かって方向転換。すると、振り返った先には本陣（Fクラス）に配置されているはずのクラスメイト、横田君がいた。

「ん？横田じゃない。どうしたの？」

「生徒会長より島田とついでに中堅部隊全員に伝言があります」

僕達はついで！？そんなことを考えているうちに横田君はメモをヒラヒラと僕たち中堅部隊にこれは生徒会長の字だぞとも言おうように見せながら、ハキハキとした声で告げる。

「『俺は戦線逃亡するような奴は大嫌いだ。逃げるなら一生話しかけないでくれ。ついでに中堅部隊、逃げてもいいがお前たちの黒歴史を校内放送で言いふらす。』」

「全軍突撃しろーっ！」

気がついたら戦場に向かって全力ダッシュしていた。中堅部隊全員が心を一つにした瞬間だった。

side
out
明久

第七問 試験召喚戦争。略して試召戦争（vsDクラス）（後編）（前書き）

問 以下の問に答えなさい。

『good および bad の比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希・風舞空の答え

『good — better — best
bad — worse — worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good — gooder — goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。good や bad の比較級と最上級は語尾に -er や -est をつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad — better — bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

第七問 試験召喚戦争。略して試召戦争（vs Dクラス）（後編）

「お、明久。逃げ帰ってこなかったのか？」

「うん。流石に不登校にはなりたくないからね。」

やっと回復試験が終わり、やる事がなくなった俺は自分の席に戻り瞑想をする事にした。

先祖からそれなりに有名な家の出の俺は色々な所から狙われやすい。そういう輩の中にはわざわざ俺を怒らせて隙を作ろうとするやつがいる。

そんな奴は限って相手の真名を口にする。俺はそういった手口に引つかからないように日々精神を鎮め、感情を殺すようにできるよう訓練している。明久のときはまだまだ訓練途中の為に自分を完全に抑えきれなかったが、これからはそんなことがないようにする為に暇な時間、つまり、今のような時間を使って精神を鍛えておこうと思ったわけだ。

ただ、これには欠点がある。周りのことがわからないのだ。感情を無にする代償として、触感と思考以外の全てを断ち切ることを前提においてる修行方法なので、周りがなにかを言おうが右から左に通る抜けてしまう。

なにか用事があるなら俺の肩を叩いてくれと雄二には言っているか

ら大丈夫だと思うが。

） 雄二side ）

「お、明久。逃げ帰ってこなかったのか？」

「うん。流石に不登校にはなりたくないからね。」

なんだこいつ、まだあの手紙が零からのだと思ってるのか？

やっぱりバカだな。

「それより空は？真名の事で謝りたいんだけど……」

こういう所は素直に敬えるんだがな……まあ、そんなことは絶対言
ってやらんが…

「雄二？」

「ん？ああ、空はあっちだ。」

そうやって俺は零が座っている席を指で指した。

そこには座禅の格好をした零が居た。零が居る場所だけ太陽の光を受け、その光景はまさに神秘的。見とれるほどの美しさがそこにはあった。

「……雄二……やっぱり後にするよ。」

「それが良いだろうな。まあ、今話しかけたらアレの餌食になるだけだな。」

「アレ？」

そうやって俺が指を指した先を見る明久。視線を向けた先に居たのは……

・零を激写するムッソリーニ

・見惚れる島田と姫路

・零を守るように立つFFF団の団員

・零の隣で同じように瞑想をする秀吉

思わず頭を抱えてしまった俺は悪くない。

なんで主要メンバーが全員ここに
いるんだよ!!!

） 美波side ）

「吉井、見て！五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

風舞からの言伝を聞いた私はいつの間にか前線へと向かう廊下を走っていた。

なんでもかは自分でもわからない。
いつかこの風舞を見たら起こるドキドキがなにかわかったらいいの
だけど……

っと、そんなことは今は関係ないわね。試召戦争に集中しないとね。

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60台常連よ」

……。あれ？嘘はついてないわよね？いつもは60点台常連だもん。こ、今回は偶々ギリギリ50点台だったただけだもん。

それに、化学教師に近寄らなかったらバレないしね。

「よし、それなら五十嵐先生と布施先生に近づかないように注意しながら学年主任のところに行こう」

「高橋先生のところね？了解！」

流石吉井！ナイス判断よ！

確か『あの子』もDクラスだったからあまり前線には出たくなかったんだけど……でも、風舞に嫌われるのは嫌だし……そ、そうよ！みつからなかったらいいのよ。

「あつ、そこにいるのもしや、Fクラス的美波お姉さま！五十嵐先生、こっちに来てください！」

「くっ！ぬかったわ！」

なんでこんなにタイミングがいいのよー！

絶対誰か仕組んだに違いないわ。それにこのままじゃ私がサバ読んだことがバレちゃうじゃない……。なんとか吉井を身代わりにできないかしら。確か坂本も身代わりにするなら吉井を使えること言ってたし……

「よし。島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ！」
いきなりこっちを向いたと思ったらなにを言い出すのよ、このバカは……

「ちよっ……！！普通逆じゃない！？『ここは僕に任せて先を急げ！』じゃないの！？」

「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！」

なんて奴なの！？

って！美春がもうすぐそこまで来てるじゃない！？

「よ、吉井！このゲス野郎！」

「お姉さま！逃がしません！」

「くっ、美春！やるしかないってことね……！！」

吉井のやつ！ちゃっかり五十嵐先生の召喚フィールドから逃れてるし！

くっ、どこまでクズなの！？

あっ、美春が召喚獣だしちゃった！？このまま逃げたら敵前逃亡で補習室送り、かといって50点台でDクラス的美春に勝てる気はないし……

ああ、もう！やればいいんでしょやれば！！

「―――試^{サモン}獣召喚っ！」

私の呼び声に応えて私の足元に幾何学的な魔法陣が現れる。

そして、姿を見せた召喚獣はデフォルメされた私だ。身長80cmぐらいで、武器にサーベルを持っている。服は軍服だ。

それに対して相手は普通のふわふわした感じの私服の上に甲冑をつけた姿。やはり此方も80cmぐらいで、武器は普通の剣だ。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋^{いちにちせんしゅう}の想いで待っていました……」

ちよっ！？いきなりなにを言い出すのこの子は！？

ちょっと吉井！見てないで助けなさいよ！！

「ところで島田さん、お姉さまって――嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！私は普通に男が好きなの！」

「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずです！」

「このわからずや！」

なんだか吉井が話しかけてきたような気がするけど今は気にしてられないわ！

「行きます、お姉さま！」

そう言いながら此方に召喚獣を走らせる美春。私もそれに対抗させるかのように自分の召喚獣を走らせる。

「はあああっ！」

「やあああっ！」

私たち二人の気合いが廊下に響く。それぞれの召喚獣が武器を構えて正面からぶつかり合い、鏖迫り合いの状態に入る。力比べの始まりだ。

「こーいのっ！」

「負けません！」

少しは均衡するだろうけど、このままだと点数で負けている私が不利だ。

「島田さん！向こうの方が点数が高いんだから、真正面からぶつかったら不利だ！」

「そんなこと言われなくてもわかってるけど、細かい動作さはないのよっ！」

ていうか、そんなこと言うなら加勢ぐらいしなさいよ！

そんなことを思った直後、均衡が崩れた。私の召喚獣が美春の召喚獣に力負けして押し倒される。そこでやっと私たちの点数が表示される。

『Fクラス 島田美波

VS

Dクラス 清水美春

化

学 53点 VS 94点』

あつ、バレた。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

美春の召喚獣が剣を私の召喚獣の喉元に突きつける。って…このままじゃ即死じゃないの！？

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！！」

「補習室？……フフツ」

楽しそうに笑う美春。そしてそのまま私の手を取り、引っ張る。

あれ？嫌な予感しかないんだけど……

「ふふっ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね。」

やっぱり！！

「よ、吉井、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！！」

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、お兄さま以外全員殺します……。」

あれ？お兄さまって誰？美春が男を近寄らせるなんて珍しい……。じやなくてっ！ちよつと吉井！！なんで、そんな逃げる体制に入ってるのよ！！

「島田さん、君のことは忘れない！」

「ああっ！吉井！なんで戦う前から別れの台詞を！？」

「邪魔者は殺します！」

美春が私の召喚獣の手足を攻撃して動けなくすると、今度は吉井の方へ召喚獣を走らせた。

やっちゃんえ、バーサーカー（美春）！！！！

「吉井、危ない！！！！試獣召喚っ！！」

と、ここでFFF団団長の須川が脇から割り込んできた。

『Fクラス 須川亮 VS Dクラス 清水美春
化学 76点 VS 41点』

そのまま須川は吉井に襲い掛かる美春の召喚獣を斬り倒す。

なんてこと！？そのまま私を見捨てた吉井を補習室に送れなかった
じゃない！！

……まあ、助けてくれたんだし……いっか。美春を倒した須川は私
に話しかけてきた。

「島田、大丈夫か？」

「ええ、助かったわ須川君。本当にありがとう。補習の鉄じー
ー西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来
い」

須川、点数アップね。吉井なんかよりは全然良いわ。

それに対して美春はというと――

「お、お姉さま！美春は諦めませんから！このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！」

とっつつつつても危険な捨て台詞を残して補習室へと引きずられながら連行されていった。

……さて、と。

「吉井」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ」

「吉井いっ！」

「は、はいっ！」

「……ウチを見捨てたわね？」

「記憶に御座いません」

へえ、誤魔化そうとしたあげく。その果てには知らんぷり……ねえ。

「……………」

「……………」

「死になさい、吉井明久！試獣召——」

「誰か！島田さんが錯乱した！本陣に連行してくれ！」

今からあなたを美春の席のとなりという特等席に送ってあげるわ！

「島田、落ち着け！吉井隊長は味方だぞ！」

「違うわ！コイツは敵！ウチの最大の敵なの！！」

放しなさい！吉井！なにフィードアウトしようとしてるのよ！

「す、須川君、よろしく」

「了解」

「こら、放しなさい須川！吉井！絶対に許さないからね！」

「は、早く連れて行って！なんかその禍々しい視線だけで殺されそうだし！」

「ちょっと、放し——殺してやるんだからあ——っ！！！」

その後のことは語らないでおこうと思う。ただ、風舞の写真は高か

った……とだけ言っとくわ。

第七問 試験召喚戦争。略して試召戦争く V S D クラスく (後編) (後書き)

……。

あれ？

何気に須川ルートフラグたった？

第八回 会長と軽音と一服と・・・

「じゃあ、明日は公欠にしてやるからさっさと行ってくるんだね。」

「了解しました。向こうに行くのは俺と璃子ちゃんとみつきさんで宜しいですね？」

「ああ、それでいいさね。私は忙しいんだ、さっさと帰りなクソジャリ」

「はい、失礼しました。」

文月学園会長こと風舞 空。

つまり、俺はボタンという音とともに学園長室を出ると同時に溜め息をつく。

学園長からは公欠を貰ったが、書類仕事とかは1日あったらすぐに溜まるからあまり休みたくないんだけどな。

まあ、愚痴っていても仕方がないし部活に行くだけでもするでしょう。向かうは音楽室。前に話した事もあるかも知れないが、俺は部活を2つ掛け持ちしている。

一つは演劇部。副部長をしているが、部長と同じ権限を持っていると言っても良い。実際、俺が生徒会長をしていなかったら部長をさせられる予定だったそう。先輩もそれに納得したらしいけど、普通は学園最後の年の三年生がするべきだと思うのは俺だけか？

もう一つは軽音楽部。こちらは一応副部長をしている。廃部寸前の部活だったのを一年生が入ってきて、なんとか成り立っている部活だ。一応部活内で最高学年なので部長をすべきなのだろうが、生徒会長と演劇部副部長とを同時にするのだから、いかんせん余裕がない。だから、そのことを話した時に部長に成りたがっていた一年生の子を部長につけたのだが……なんともいえない。

まあ、まずは軽音楽部に行ってみることにしようと思う。

「お前らちゃんとやってるか？」

「へ？あつ、そらくんだあ」

俺が音楽室の扉を開くと、目の前にはギターを持った女の子がいた。

彼女の名前は『平沢 ヒラザワ 唯 ユイ』。この軽音楽部の部員だ。この軽音楽部に入った切っ掛けは、この軽音楽部を軽い音楽と間違えて入ってきたのが切っ掛けだ。

意味不だろ？天然もコレは行き過ぎだと思っただが……

「あ、空さん！お茶飲みます？」

「ああ、頼むよ。」

「そ、空先輩！？い、いえ、これには理由が……」

「まあ、落ち着けて。滯は流されやすいからな。」

「はははっ！滯、言われてやんのー！！」

「律、お前が一番問題なんだが？」

順番にいおう。

一人目に話しかけてきたのが『コトブキ琴吹 ツムギ紬』。通称『ムギ』。キーボードを担当している、所謂お嬢様だ。まあ、本人は平凡に憧れているゆうだが……。

二人目は『アキヤマ秋山 ミオ滯』。ベース&ボーカルを担当している。恥ずかしがり屋で寂しがり屋。男性が苦手。

三人目は『タイナカ田井中 リツ律』。俺が部長にはなれないといったときに部長になりたいと言ってきた子だ。ドラムを担当しており、基本はこの部活のムードメーカーになっている。

調子にのることが多々あるが、周りもサポートとかしてくれるから大丈夫だろう。

「空さん、どうぞ。」

「ああ、ありがとうムギ。それで唯、ちょっとはうまくなったか？」

俺が椅子に座り、少しするとムギが紅茶を淹れて持ってきてくれた。

俺はそのことに礼を言いつつ、唯に前々から聞きたかったことを聞いてみた。唯はギターを入部と共に初めて、ついこの間ギターを買ったばかりだ。つまり、完全なる素人というわけだ。

俺は一応ギタリストということにしているが、他の楽器もしている。所謂オールランダーというやつだ。そこで、俺がギターを教えてあげたわけだが……なんと、唯には絶対音感があるみたいなんだ。

音楽をしている者からしたら、なんて恵まれているんだっ！！

と言いたいわけだが……唯はその絶対音感を使い切れていない。勿体無いから、アドバイスをしたりしてみたけど、一向に良くならないから諦めた。

確か絶対音感って人工的にゲットできるって話を聞いたことがあるんだが……あれは本当なのか？

「したよ。……多分。（ボソッ）」

「最後なにか言わなかったか？」

「あはは、気のせいだよ」

「そうか」

絶対なにか言った。冷や汗流してるし、目も逸らしてるし……嘘下手すぎ。

まあ、下手に突っ込むのもあれだから別に何もいわないけど

「今日は様子を見に來ただけだからすぐ、一曲だけやって帰るとするよ。楽器はなにがいい？」

「ドラム!!」

「ギター!!」

「ベース!!」

「キーボード!!」

なんかしらんがみんないっぺんに言ってきた。これを俺が決めたら五月蠅いやつがいるから、『じゃあ、ジャンケンで決めてくれ。』とだけ言っとくことにした。

するとどうだろうか。俺をそっちのけでジャンケンを始めた。

まあ、いいや。この後に演劇部に寄るとなると、そろそろ行かなきゃ最終下校時間を超えてしまうから急ぐことにするでしょう。

おっ、決まったみたいだな。唯ってことはギターか。じゃあ、あの弾けたらすげえっ!! てなる曲を試してみるとしよう……

「じゃあ、行くぜ? 『ナイト・オブ・ナイツ』っ!!」

〽
数分後
〽

「空君、相変わらず上手だね」

「結構昔からやってるからな。下手なままだったら流石にヘコむさ?」

なんとかノーマスで弾けた。いつもこの曲を弾くときは結構緊張するからな、ちゃんと弾けて良かった。

「じゃ、俺は演劇部に行った後に帰るから。」

じゃーな。とだけいってそそくさと部屋をでる。速攻でないと律と唯のコンビが五月蠅いからな。

まあ、今も扉の向こうでぎゃあぎゃあ言ってるが……。このまま此処にいても面倒だからさっさと行ってしまうおう。

面倒なんていったら可哀想？

あいつらにそんなことを気にしてたら身が持たないよ。

さ、次は演劇部だ。

第九問 生徒会長と演劇と・・・

「やってきました、演劇部です。」

なにをやっているのか？知らん。

だって最近きてないんだぜ？まあ、この前俺が考えた演劇をするとか秀吉が言っていたような気がするな。

演劇部は頼れる奴らがいっぱいいるからあまり心配はしてないんだよな。

「貴様っ！私を侮辱するのかっ!？」

「侮辱…ね。テメェに侮辱するほどの価値などないと思うがね。」

おっ、どうやらやってるみたいだな。今回する演劇は三国志の世界が舞台だ。演劇部に女子部員が多かったから有名どころが女子になってるけど。

確か一番目が華雄役の三年生。

二番目がこの世界に時間跳躍してしまった裏の世界に生きていた男の娘役の秀吉。

簡単にいうとオリ主だ。しかも最強・ハーレム系の。曹操軍所属の天の御使いという設定だったはずだ。

天の御使いとは管路という占い師によって予言された『乱世を鎮め、平和へて導く天の使い人』とかそんなかんじの人物設定だったはずだ。

「我が名は関羽！武の頂点、呂布奉先よ…いざ、尋常に勝負っ！」

「……かかってこい」

今度は関羽と呂布という武将だ。場面からいって反董卓連合のあたりだと思う。

そういえばこの物語には俺と同じく真名が使われている。

まあ、真名については秀吉が俺の顔をみて思いついたかのように部長に提案したからなんだがな

お？休憩にはいったみたいだ。

とにかく拍手しておこ

「いやあ、良かったですよ。」

「空よ、来るのなら先に言ってくれ」

秀吉はどうやら気づいていたみたいだ。他の皆は驚いた顔をしているのに秀吉だけ普通に話しかけてくる。

いや、どうやら秀吉だけじゃなかったらしい。

「そうだぞ風舞。先に言っておいてくれたら部員のテンションも上げたのに……」

『^{クギ}軀祇 ^{ハナセ}華瀬』。この演劇部の部長で生徒会執行部に所属する三年生だ。あだ名は『くーにゃん』。大体の生徒はこの愛称の意味を知らない。何故なら、くーにゃんは軀祇先輩が心を許した存在にしか見せない裏の人格だからだ。

それは『猫』。表の人格は毅然とした態度のクール系女子。しかし、裏の人格はまるで猫のように人なつっこく、愛くるしいような……。そんな人格になるのだ。

このときの可愛さはそんじょそこらではおめにかかれないうくらいだ。それもそのはず、くーにゃんは美少女。これがあの鉄人だったら吐き気を通り越して心臓が破裂するが、彼女は美少女。しかも、いつものギャップが激しくて余計に可愛くみえてしまうのだ。

まあ、くーにゃんは俺と秀吉ぐらいしか知らないが……

「くーにゃんがどうしてもっていうならいいですよ、軀祇先輩。」

「ふふ、なら今度からはそうさせてもらおうかな？」

ちなみにくーにゃんはこの演劇では甘寧の役をやって貰っている。

「まあ、今日は遅くまで練習だな。お前が考えた物語だから、最後まで観てもらおうぞ？もちろん、貴様の『天の御使い』の役も徹底的にやるからな。」

「……マジですか？」

「マジだ。」

「……………」

絶句した。

絶望した。

泣けてきた。

天の御使いとは、この世界にやってきた現代日本人が後漢時代の争

いを収めるべく流星に乗ってやってくる、まさに『天』の御使いのことだ。

まあ、どこかで聞いたことのある話だが、あまり気にするな。

気にしたら負けだ。俺は負けたがな。

とにかく、これだけは言わせてくれ。

不幸だあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああっ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9507o/>

会長と風紀委員長と召喚獣

2011年8月8日17時20分発行